

月刊

2010

11
月号

みんぱく

特集 考腹論

ハラを考える



ハラ凹ハラ凸 ぼく ぼこ 樫永真佐夫

産後のハラは命の証し——パラオの出産儀礼 安井真奈美

小さくなった服の逆襲 深井晃子

太鼓腹のほとけたち 立川武蔵

イスラーム世界のハラ踊り——ベリーダンス 西尾哲夫

「ポリネシア人のハラ」は物語る 片山一道

ボクサーのハラ 樫永真佐夫

大田黒元雄（一八九三〜一九七九）をご存じだろうか。クラシック評論の草分け、西洋音楽の水先案内人などとは呼ぶ。旧大田黒邸は東京杉並区荻窪に広大な庭園として残されているので、散歩した方もいらっしやるかもしれない。

一九八一年に開園した大田黒公園の二七〇〇坪の敷地には、日本庭園やレンガ造りの洋館が当時のままに再現されている。これですら元の大田黒邸の三〇パーセントにすぎないという。

大田黒の父親は東芝を業界トップに育成したり、九州電力の創設にかかわったりした実業家である。大田黒が父から杉並区の敷地をプレゼントされたのは一九三三年、四〇歳の年である。普通ならとくに独立している年齢だが、彼は生涯を高等遊民として過ごした。

中学を卒業後、高校には進まず東京音楽学校の教師についてピアノを習った大田黒は、一九二二年から一四年までロンドンに留学し、音楽会やオペラに通いつめる。一時帰国していた間に第一次世界大戦が勃発。ロンドンで買収求めた楽書や楽譜をもとに『バッハよりシエーンベルヒ』という評論書を上梓する。このときシエーンベルクは四二歳、代表作『月に憑かれたピエロ』を発表してわず

プロフィール
ピアニスト・文筆家。大阪音楽大学教授。演奏と執筆を両立させる希有な存在。9月には「大田黒元雄と音楽と文学の仲間たち」を開催。主著に「翼のはえた指」（吉田秀和賞）、「6本指のゴルトベルク」（講談社エッセイ賞）など。



大田黒元雄のサロン

青柳いづみこ

か三年だから、大田黒の先物買いのほどがうかがわれる。

画期的なこの書が多く音楽青年をひきつけ、当時大森山王に住んでいた大田黒のもとに集結させることになる。一九二五年〜一六年にかけて大森のサロンで開かれた「ピアノの夕」の出席者には、のちの音楽評論家・野村光一、ラジオ番組「話の泉」の解説者・堀内敬三、作曲家・菅原明朗ら、楽壇の中枢を担うことになる人々とともに、同じく大森在住の詩人・堀口大学や渡仏前の版画家・長谷川潔の名も見える。

その長谷川潔の版画がプログラムの表紙を飾った「ピアノの夕」第一回（一九一五年二月一八日）では、野村光一がドビュッシーの『小さな羊飼』、堀内敬三が『ロマンス』を弾き語りし、大田黒が『牧神の午後への前奏曲』のピアノ・ソロ版を演奏している。この『牧神』も、大田黒がロンドン遊学中に演奏会で聴き、楽譜を入手したものだ。当時ドビュッシーは存命で、ヨーロッパの前衛作曲家だったのである。

リアルタイムで洋楽を導入し、自ら演奏し啓蒙につとめた大田黒の姿勢に敬意を評するとともに、「知らないものが沢山あった」時代の熱気をつくつくつらやましく思う。



- 1 エッセイ 千文字
大田黒元雄のサロン 青柳いづみこ
- 2 特集 考腹論——ハラを考える
ハラ凹ハラ凸 榎永 真佐夫
- 4 産後のハラは命の証し——バラオの出産儀礼 安井 真奈美
- 6 小さくなった服の逆襲 深井 晃子
- 6 太鼓腹のほとけたち 立川 武蔵
- 7 イスラム世界のハラ踊り——ベリーダンス 西尾 哲夫
- 8 「ポリネシア人のハラ」は物語る 片山 一道
- 9 ボクサーのハラ 榎永 真佐夫
- 10 研究フォーラム
「驚き」と「好奇心」を呼び覚ませ！
山中 由里子
- 12 みんなぱく Information
- 14 地球ミュージアム紀行
こどもとみんなぱくを結ぶもの
国立民族学博物館
五月女 賢司
- 15 みんなぱく 私の逸品
ダンダシュのベリーダンス衣装
ロータス
- 16 散策と思索の径
白頭山にのぼる
栗田 靖之
- 18 多文化をささえる人びと
共住懇の目指すもの、
それは大久保でコミュニティをどう作るかだ。
稲葉 佳子
- 20 歳時世相篇
バッタとの格闘
三島 禎子
- 22 フィールドで考える
草原にびびくクルアーン
藤本 透子
- 24 次号予告・編集後記



特集 考腹論

ハラを考える

土人形(力士・谷風) 標本番号 H0157899
江戸時代の大横綱は、大きなハラを武器に勝利を重ねた

ハラ凹ハラ凸

梶永真佐夫

民博 研究戦略センター

ぽっこりお腹

ハノイ滞在中のある日、日本人の友人と早朝のジョギングを始めた。友人はみるみる痩せて、「体調もよくなった」と喜んだ。しかし、彼のベトナム人の奥さんからは「貧相

でみっともない。近所の手前もあるから、ジョギングはやめて、太ってほしい」と、はなはだ不評だった。豊満で貫禄のあるハラが、地位や経済力があることを語るからだ。いっぽう先進国では、メタボリックシンドロームは成人病の元凶として目の敵にされる。中年太りも要注意である。今の日本では健康面から腹八分くらいがいいとされ、むしろハラ凹の評価が高まっている。アラフォーにもなると、「ぽっこりお腹」を警戒し始める。

「ぽっこりお腹」とは、加齢とともに脂肪がたまり、骨盤のゆがみ、腹筋の衰えと相まって、下腹が出てくるハラ凸現象である。しかし、深層筋をはじめハラを包んでいる筋肉群を強化すると、ハラ凹にもどるはず。ぽっこりお腹は都市生活者にとって年齢相応で仕方がない、と思っていたが、今やそう易々とハラに年齢や世代を語らせてはいけなくなってきた。ハラは黙らされようとしている。

かなり表情豊か

ハラは伸縮可能な長い臓腑のみならず、内臓脂肪、皮下脂肪も包み込んでいる。しかも骨が邪魔しない前と左右には、かなり広がりることができる。だから、健康状態、食生活、出産、年齢、職業、動作、装飾など、いろんな要因で形を変えることができる。おまけにまん中にはヘソという、突起にも窪みにもなるヘンテコな印がついていて、かなり表情豊かである。ハラは放っておいても語る。黙らせるのは容易でない。

たとえばギリシャ彫刻にも見るがごとく、たくましく凹凸のある腹筋は、男性的な強靱な肉体の象徴である。ハラ凹の方が上体の筋肉の見事さが引き立つから、ボディビルダーのように見(魅)せる競技者は、ハラに見事な腹筋を波打たせている。いや、じつは一般の若者でさえ、夏が

近づくと、海水浴場での生存競争にむけて、俄然腹筋のトレーニングに励むのだ。ハラに語ってもらうために。

妊婦を解放させる記号

女性もハラを凹ませることに余念がない。そのためにもちろん運動にも励む。気安く見せない前提だから、下着の力でハラ凹ボディラインをつくりだすという裏技もある。あるいは、何日も腹ぺこなのを我慢して、ハラ凹を手に入れようという人も、身近に思い当たるだろう。

妊婦がハラ凹でいるのは難しいが、妊娠に伴う過度の体重増加は日本の産婦人科でも注意されるようだ。いっぽうベトナムでは、家族や親族の熱心な指導的介護のおかげで、過剰な糖分摂取と運動不足でハラ凸の域をこえて肥満化している妊婦たちによく出会う。これまでずいぶん長いあいだ、妊娠中のハラは、妊婦を過酷な生産労働や家事労働から解放してくれる、大事な記号でもあったのだろう。なにしろ近代医療が発達するまで、出産はつねに死と隣り合わせだったのだ。それを思うと、豊満な女性のハラ凸が、豊穡や再生産の象徴としてしばしば世界各地で神聖視されてきたのも無理はない。

今の日本では、ハラ凹もハラ凸も心がけ次第かもしれない。あなたはどっちでいきますか。



モアイ像はわずかだけ出バラ

ボディビルダーは、筋肉を増強させ、かつ減量し、地肌を焼いて、筋肉の凹凸の陰翳を浮きだたせる(2010年大阪クラス別ボディビル選手権優勝者、赤星健次郎選手)

産後のハラは命の証し——パラオの出産儀礼

安井眞奈美 天理大学准教授

人びとの視線が、産婦のお腹に

妊婦の突き出たお腹は、多くの文化で豊穡のシンボルとみなされてきた。では、赤ん坊を産んだ後の女性のお腹はどうだろうか。出産後、膨らみなくなったお腹に、人びとの視線が向けられることはあまりない。しかも現代の女性たちであれば、出産直後の伸びきったお腹を、人前に曝け出すことなど滅多にないだろう。しかし興味深いことに、パラオ共和国では産後の女性のお腹にこそ、多くの人びとの視線が集まる。



パラオ共和国は、西太平洋カロリン諸島西端に位置する大小二〇〇以上の島々からなる島嶼国である。パラオでは、初めて出産した女性を祝福する出産儀礼が現在もおこなわれている。そのときに、着飾った産婦がお腹を出して、大勢の前に登場するのである。

腰裏をつけて華々しく登場

この儀礼は、かつては産後二、三日目から、また病院で出産するようになった現在では、産後一カ月ころから始められる。まず産婦が、出産の知識に長けた女性につきそわれ、約一週間にわたり毎日、湯を数回浴びる。その最後の日に、今度は簡易サウナに入って身体を温める。湯と蒸気で温めることで、産婦の心身は癒やされると考えられている。その間、産婦の食事の用意や身の回りの世話などは、彼女の母や姉、または同じ母系親族集団の女性たちが担当する。それゆえ彼女は、さながら

出産儀礼でお客の前に出る産婦

産後のエステを受けているかのように、赤ん坊とリラックスして過すことができる。次に産婦は、サウナを終えた後、腰裏をつけて着飾り、二〇〇人から三〇〇人もの人びとが集まる場に華々しく登場する。彼女の肌には、黄色いウコンの粉を混ぜたヤシ油が塗られる。パラオでは、臍が卑猥な部分とされているため、ベルトなどで隠される。またかつて産婦は、腰裏だけをつけて上半身は裸で登場したが、近年では多くの女性たちが胸を隠すようになった。それでも、出産儀礼で産婦が人びとに披露するのは、産後に快復した身体、より正確にいえばお腹であるといえよう。

「出産は死」だった

その背景には、パラオの人びとがよく知っている神話がある。神話によると、かつて誰も出産の方法を知らず、妊娠すると妊婦のお腹を切り裂いて胎児を取り出していた。そのため、妊婦は必ず死ぬ運命にあった。あるとき、神様が人間の娘に恋をした。神様は人間の姿になって彼女と結婚し、やがて彼女は妊娠した。まわりの人びとは悲しんだ。なぜなら出産は、彼女の死を意味するからである。しかし、神様である夫が出産に立会い、胎児が産道を通って生まれる、本来の方法を妻に教えた。おかげで妻は無事に出産することができ、それを祝福して、パラオでは出産儀礼を始めるようになったという。



伝統工芸品・ストーリーボードに描かれた出産の神話。(左はトレース図) お腹を切っている様子と、無事出産した様子が描かれている

小さくなった服の逆襲

深井 晃子 京都服飾文化研究財団チーフキュレーター



1960年代 パコ・ラバンヌ

出すか、被うか

服は、身体を被うもの。そう書きながら、「え、服は身体を被うものだった？」と改めて思うほど、太腿むき出し、腹出しは、すっかり見慣れた日本の風景である。

とはいえインターネット情報では、身体を頭部まで被うブルカ(チャドル)という服を着るイスラム文化圏の女性たちを話題にしている。彼女たちは、ほんの少しか被う部分を減らしたという理由で罰金を科せられると。こんな世界も確かにあるが、日本のような(ファッション)、つまり欧米の影響が強い服飾文化では、女性の身体が被われる部分はこれまで一番少なくなってきた。

解放とファッション

服が劇的なまでに縮小したのは、一九六〇年代ミニによって脚出しが解禁されたときだった。腹出しもこのときファッションとして広がる。当時は、自由、フェミニズム、ボディコンシャスといった意識が高まっていた。色々な局面で伝統的な掟が勢いよく破られ、ファッションはそれを扇動

した。

海辺では腹出しのツーピース水着(ビキニ)が、核実験の島に因むインパクトあるネーミングとともに人気になる。一九七〇年代には、おっぱい出し、さらには何もつけないヌードも解禁になっていく。ビキニに比べればずっと慎ましい腹出しは、既にアメリカで水着や海辺ファッションとして一九三〇年代に登場していた。だが、腹出しがファッションとして認知されるのは、クレイジューサンローラン、パコ・ラバンヌら一九六〇年代を代表するパリのデザイナーたちが、腹出しを提案したときである。社会的な議論を高めながら「解放」という大義に助けられて、腹出しは若い女性たちに支持された。わたしも当時腹出しを支持実践した。だが腰痛に悩む今、両者の因果関係を疑っている。

二〇世紀のファッションは、カジュアル化に向かって大きく舵を切った。このまま進めば、待ち受けるのは何も被わない、つまり着る文化の消滅である。だから、もうこのあたりで留まってほしいと願っているとき、森ガールが登場した。森ガールとよばれる彼女たちは、服を重ね着して身体を被う。小さくなりすぎた服の逆襲が密かに起こっている。



1970年代ファッション

太鼓腹のほとけたち

たちかわ むさし
立川 武蔵 愛知学院大学教授 民博 名誉教授

ほとけのランキング

太鼓腹について書くことになった、とわたしがいったら、妻が「自分のお腹のことを書くの」と訊いてきた。最近、肩や腕の筋肉が落ちてきて、出てくるのは腹ばかりだ。幼児ならばともかく、大人になって腹が出るのは恰好がわるい。

仏教のほとけたちにもお腹の出ている方がたくさんいるが、太鼓腹か否かは、それぞれのパンテオン内のランキングと関係するようだ。仏教のパンテオンは、(一)仏、(二)菩薩(仏になろうと努力する者)、(三)女神、(四)忿怒尊(怒ったすがたで仏法を守護する者)と(五)天(星辰、ヒンドゥー教の神々など)の五グループにわけられる。

仏の身体はスマートであり、太鼓腹の阿弥陀仏や大日如来は考えられない。後期の密教における多面多臂の恐ろしい形相をした秘密仏も腹は出ていない。さまざまな菩薩がいるが、彼らにも太鼓腹は見られない。豊かな体の女神はいないわけではないが、太鼓腹の女神はいない。その理由はわかる気がするが、ここには書けない。

忿怒尊と布袋

忿怒尊のほとんどは太鼓腹だ。図像学のテキストは彼らが「恐ろしい」と強調するが、太鼓腹は彼らの恐ろしさをやわらげ、親しみさえ覚えさせる。第五の「天」の代表である財神クベラの腹は豊かだ。それは「充分に食べていた」

ことの証しと思われる。

このように、仏教のパンテオンの上層部つまり仏や菩薩には太鼓腹は見られない。彼らは「お腹がすいても我慢している」にちがいないのだ。太鼓腹の忿怒尊は「充分に食べて」世の中の不正を怒っているのであろう。

日本では太鼓腹の布袋が有名だ。彼は後漢の禅僧であり、大きな腹を見せて笑いながら袋を担いで喜捨(施し)を求め歩いたという。布袋は「充分に食べていた」と思われる。中国では親しい人びとのあいだの挨拶は「食べたか」である。

現代の餓鬼

天や人間よりも「低い」餓鬼は、常に飢えと渇きに苦しみ、食べても満たされることがない。餓鬼は通常、腹を突き出したすがたで描かれる。わたしの腹は布袋のそれよりも餓鬼に似てきた。極度に飢えると、腹部のみが突き出るというが、この現代の餓鬼は充分に食べた証しのメタボ腹である。たしかにクベラ、布袋、餓鬼の腹は食べることと関係がある。食べて豊かになるのか、食べても満たされないのかの違いはある。



チベット仏教輪廻図の餓鬼道



クベラ
インド、クシャーン朝(二世紀ごろ)
国立博物館
ニューデリー(撮影・横田憲治)



太鼓腹のマハーカライラ(大黒)
カトマンドウ、ネパール



阿闍梨
スヴァヤンブリーナート寺院展示室
カトマンドウ、ネパール

イスラーム世界のハラ踊り

ベリーダンス

にしお てつお
西尾 哲夫 民博 民族文化研究部

下腹の肉をぶるぶる

このところ日本でもブームになっているベリーダンスは、「ハラ(ベリー)踊り」という名称そのままに、はげしく腰をふりながら下腹の肉をぶるぶると震わせる特徴的な動きで知られている。だがアラビア語ではベリーダンスのことをラクス・シヤルキー、つまり「東の踊り」とよんでおり、ハラ(腹)を意味することは入っていない。

ベリーダンスの歴史はよくわからない。アラビアンナイトの翻訳者でもあり、一九世紀カイロの庶民生活を詳細に記録したエドワード・レインによると、エジプトではガワジーとよばれる人びと(いわゆるジブシー)が結婚式などによばれて踊っていたらしい。ナポレオンのエジプト遠征に同行した人びとの回想録などにも、腰を激しくふる官能的な踊りに魅了されたという記事がある。ただし一九世紀のベリーダンサーは腹を露出していたわけではないようだ。ベリーダンサーがビキニスタイルで踊るようになったのは、二〇世紀に入ってショービジネス化した後のことらしい。

尻に脂肪をつけてアピール

一九世紀のカイロ風俗を描いたイギリス人画家デイ



ベリーダンス発表会で踊る
パリの女子高生と子どもたち



カイロの国際ベリーダンス
フェスティバルで踊る
ガワジーの女性



19世紀初頭、カイロのガワジー
(デイビッド・ロバーツ画、ロンドン)

ビッド・ロバーツの絵を見ると、ダンサーはかなり大胆に胸元を見せてはいるものの、腹からは二重三重にガードされていてとても素肌が見えるような状態ではない。中世イスラーム社会史の研究者によると、女性の尻は男性にとつて最大級のセックスアピールだったから、女性たちは尻に脂肪をつけるための食事を工夫するなどして努力を重ねたらしい。もともと個人的な感想をつけ加えるならば、たとえばエジプト女性の場合などは特に努力しなくとも、ほとんどの人が雄大な尻を獲得できるのではないかと思う。

先述の研究者によると、腰を大きくふりながら歩くモンローウォークをさらに大きにさせたような歩き方もあり、知りあいの中東系女性がお里帰りのさいにスカートを重ねて腰をふりながら歩いていたり、後ろから男性がぞろぞろついてきたそう(少しわりびいて受けとめたほうがいいかもしれない)。

観光産業として

もともとイスラームには、歌舞音楽は信仰の邪魔になるという考えがあり、露出度の高いビキニスタイルで踊るベリーダンサーを白眼視する人びとも少なくない。一部のイスラーム法学者のあいだでは、ベリーダンサーはメッカ巡礼をしてはならないという見方もある。

現在のカイロでは、イスラームとのかねあい腹露部を露出しないワンピース型の衣装や、ビキニ型であっても腹部にチュールレースをあしらった衣装を身につけるダンサーも増えてきた。ベリーダンサーの社会的地位はあまり高くはないのだが、エジプトなどではベリーダンスを観光産業として認め、民族文化としてこれを伝えていくとする動きも出てきている。ハラ(腹)のさぐりあいを通して、腹の露出度も決まってくるのだから。

「ポリネシア人のハラ」は物語る

かたやま かずひろ
片山 一 道 京都大学名誉教授



むかしの衣装をまとう神官役は見事な出臍

真ん中にある饒舌なパーツ

南半球の大洋世界に散らばる島々のポリネシア人は、とりわけユニークな身体特徴をもつ。大柄で筋骨隆々のヘラクレス型体形で、先端肥大したごとき巨大な下顎と手足をもち、腹部は過剰なまでに肥大している。こうした彼らの身体こそ、雨風寒暑飢餓にさいなまれた古代の遠洋航海活動への適応装置、祖先から受け継いだ歴史遺産なのである。

さて本稿のテーマは「ハラ」、つまり腹、「おなか」。ポリネシア人の場合、なんとも愛嬌のある身体パーツではある。さながら彼らのトレッドマークのごとし。無口な彼らの真ん中に位置する饒舌なパーツなのである。

お相撲さんのような「あんこ腹」とか、ラグビーのフッカーのごとき「寸胴腹」たちが島中にあふれる。「おじさんのビール腹」と異なり、二段腹や三段腹ではない。また「妊婦腹」とも違い、へソまわりが最膨張、厚い胴は背中側にも伸びる。皮下脂肪が厚すぎ、腹筋や上腰筋が「霜ふり」状態なのかもしれない。上下肢部の皮脂厚の胴体部のそれに対する比率「中央体脂肪示数」の値が小さいことから、胴部に脂肪がたまりやすい質だともわかる。ついでに

いえば、やたら出臍が目立つ。そうでない腹は画竜点睛を欠く感がするほどだ。

食いだめ体質

こうしたポリネシア人腹は、むかしから存在したのではなく、じつは最近になり生まれた現象のようだ。たとえば一八世紀のころの西欧人探検屋たちの記述は大概、「誰もが高身長、たくましい四肢、申し分ない体格である。案山子になれるほど痩せた者はいないし、活動のじやまになるほど太った者もない」などである。ただ、「動くもままならぬほどに太った首長を打ち負かした」などの記述もあり、ことにタヒチやトンガなどの首長階級には脂肪太りもいたようだが、あくまでも例外的な存在だったに違いない。

過剰に肥満の腹をかかえたポリネシア人が多くなったのは、身体の時流化現象と関係がある。近年日本人の体形変化のように、生活様式の激変とともに、あるグループの成長パターンや表現型が変貌することだ。ポリネシア人の場合、つましき島嶼生活に適応しつつ育まれた潜在的肥満体質、あるいは「食いだめ体質」が原因なのだろう。食

用資源が十分でない先史時代に巨大な肉体を維持するため、脂肪組織を食物貯蔵庫として活用するようになった。すこしばかり旨みのある銀行のようなもので、多めに食える機会には脂肪として蓄え、あとはそれを食いつないでいく。そんな仕組みが身についたのだろう。

飢えと饗宴をくり返す日々だった

いみじくも「儉約遺伝子型」という概念で説明されるように、かつてのポリネシア人の暮らしは実際、飢えと饗宴のくり返しだった。食うや食わずの日常だが、ときたまの盛大な宴では食えるだけ食いまくる。そんな状況を一変させたのが西欧風食文化。まるで毎日が饗宴のようになった。

一日に二度三度も食事すれば、カロリーのバランスが崩れ、皮下脂肪は否応無しに蓄えこまれる。もちろん西欧流の生活習慣は、食生活にとどまらない。権や帆が船外機に変わり、車やオートバイなどが普及した結果、肉体活動が極端に減じられることになった。もはや脂肪は蓄えられるばかり、体重超過、新世界症候群が蔓延する社会となった、というわけである。

かくして、ポリネシア人は自らの伝統的体質と西欧流生活習慣とのミスマッチに呻吟することとなった。つましき海洋世界での適応装置が仇になったのである。彼らが太るのは「食べる」からではない。むしろ「食べなかつた」からなのだ。そんなことを、「ポリネシア人のハラ」は物語る。



饗宴の日、主役の豚はハラ貯蔵庫へと消えた



吾が名づけ親のハラは偉大である



30歳を超えると誰もが巨大なハラを誇る



勝つために体を絞り、ハラを鍛える

ボクサーのハラ

かしなが まさお
樫永 真佐夫 民博 研究戦略センター

中国雲南省のミャオ族出身のボクサーが、世界タイトルマッチで善戦した。「とうとうあらわれたか」と思った。というのは、近い地域で現地調査している筆者も、ボクサーにむいた体形の若者が現地に多いと思っていたからだ。いかにも筋骨隆々の体格ではない。むしろ細い。しかし日々の農作業などで足腰の安定感がある。何ラウンドもパンチを出し続けるには、足腰が基本なのである。筆者の視線は自然に腰回り、ハラにむかう。読者たちは、余分な脂肪を絞りきったボクサーのハラが、縦にも横にも割れているのをきくと知っているだろう。ボクサーは、仰向けの姿勢から上体を起こすランジ運動を何百回も繰り返す。ときには、腹筋台の傾斜やダンベルでさらに負荷をかける。仕上げに、仰向けに寝て、メディシンボールというバスケットボールに似たオモリ入りのボールを、他の人に上から打ち落としてもらうことさえある。相手のパンチのタイミングに合わせてハラに力を入れ、打撃に耐える訓練をするためである。ついでに根性もたたき込む。

ハラにある代表的な急所は、みぞおちと肝臓(右脇腹)である。ボディブローがきいてしまえば、リングの上を這いつくばらされる。痛くて呼吸もできない。脳しんどうをおこしているわけではないから、意識がはっきりしている分、よけいに苦しい。多くのボクサーが、練習や試合でボディブローをもらって倒され、「もうやめてやる」と誓った経験をもつのではないだろうか。つらくても、腹直筋、腹斜筋をはじめとする腹筋群を厚い鎧とするべく、腹筋を痛めつけ、鍛える。同じ苦しみを二度と味わわないためだ。

たくましく六つに割れ、無骨な陰影をにじませているボクサーのハラ、じつはこれこそ彼の内奥に刻まれた恐怖心の証明なのだ。



「驚き」と「好奇心」を呼び覚ませ！

やまなか ゆりこ
山中 由里子
民博 民族文化研究部

人類は常に、未知なるものに対する好奇心、畏怖、憧憬、知識欲、収集欲に動かされてきた。珍しい不思議なもの・現象を説明し、可視化しようとする欲求は、異なる文化圏において種々さまざまな「異形」として結晶を結び、それは時代とともに移り変わってきた。その類似性あるいは多様性は、我々自身の好奇心を刺激してやまない。

世にも不思議なもの

ギリシアとインドのことで話す太陽の木と月の木、三日間は水が流れ、三日間は砂が流れる河、犬の頭をした人間……。これらはアレクサンドロスが東方の地で遭遇した奇怪な動植物や自然現象である。もちろん史実ではない。紀元三世紀ごろまでにアレクサンドリアで成立したとされるギリシア語の『アレクサンドロス物語』のなかで、マケドニアの征服王が繰り広げる冒険のなかに登場する「東方の驚異」である。この『アレクサンドロス物語』はその後、さまざまな言語に翻訳され、中東、ヨーロッパ各地へと伝播していった。その過程で「東方の驚異」をめぐるエピソードは物語の枠組みを離れ、中世の博物誌、地誌、歴史書、宗教書などに取り入れられ、この世の「周縁」のイメージと深く結びついた。中世ヨーロッパと中東では、不可思議な動植物や自然現象について似たような話が存在するが、それは、この『アレクサンドロス物語』の他にも、一神教的宗教説話群、古代ギリシア・ローマの地理学・科学の遺産などを共有しているからである。

ミラビリアとアジャイイブ

このような辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説は、中世ヨーロッパにおいてはラテン語でmirabiliaとよ

ばれ、フランス語ではmerveilles、英語ではmiraclesとなった。一方、中世イスラム世界においては、この世の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、アラビア語・ペルシア語でʿajāībとよばれる。「ミラビリア」も「アジャイイブ」も、いずれも「驚異、驚異的なもの」を意味する語の複数形である。研究者はこのような言説を「驚異譚」とよぶ。

これまでにこの「驚異譚」をめぐる文化圏の相互交流をダイナミックに捉え、中東とヨーロッパにおける驚異譚の、古代・中



いつ、誰が何のために建てたかわからなかった遺跡には驚異譚がつきものであった。イギリスのストーンヘンジは、アーサー王伝説に登場する魔術師マーリンが魔法の力で建てたと言われられた

世・近世にかけての大きな展開を俯瞰しようとした総合的な研究はあまりない。そこで立ち上げたのが、民博の共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」である。

日本人の視点

いし「文化（社会）の無意識」の輪郭をより明確にすることができないのではないかと考える。本研究には西洋古典文学、西洋中世文学、西洋近世史、中世・近世中東史、比較文学といった異分野の専門家がかかわっており、これらが協力して各時代・地域の驚異譚を比較し、伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムを解明しつてゆこうとしている。

西洋でも、中東でもない東アジア文化圏に属する日本人の我々がこのような研究に取り組み意味は何なのか。ヨーロッパ人の研究者にとときき聞かれる質問である。その意義は、西洋からも中東からも離れた日本に足をおいているからこそ、より複眼的にこの問題に取り組みことができる、というところにある。「文化の三点測量」によって驚異譚の深層に迫ることができるのである。

そもそも、中東とヨーロッパにおける驚異譚と、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、どう違うのか。「驚異」と「怪異」の深層には共通している部分もあるのではないか。またその表象の生成のメカニズムが異なるとしたら、その要因は風土なのか、宗教なのか、言語なのか、それ以外のもの

イギリス、グラストンベリー近郊の「ゴグとマゴグ」とよばれる古木。ゴグとマゴグは「聖書」や「コーラン」にも登場する文明世界の周縁にいる蛮民



最初からこのような大きな問題に挑むつもりではないが、しかし日本人だからこそ浮かんでくるこうした疑問を常に意識しながら東西を眺望すると、「そもそも、人はなぜ驚異／怪異を語りたがり、集めたがるのか」という根源的な問いに、これまでにない角度から光をあてることができるはずである。

近代的な理性は、驚異譚を「オカルト」、「トンデモ話」と片付けてしまう。また、今や情報は溢れ、通信手段も進歩したにもかかわらず、他者に対する好奇心や想像力が萎えてしまった人間も少なくない。だからこそ本研究は、人間精神の根幹にある（とわたしは信じてやまない）「驚き」と「好奇心」を呼び覚ますようなものでありたい。

民博共同研究
「驚異譚にみる文化交流の諸相」
——中東・ヨーロッパを中心に——
2010年10月～2014年3月
代表者：山中 由里子
*この研究は科学研究費補助金の研究（基盤型）
「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」と並行しておこなっている。

特別展

「彫刻家エル・アナツイの 아프리카
—アートと文化をめぐる旅」

ガーナ生まれでナイジェリア在住のエル・アナツイは、現代アフリカを代表する彫刻家です。木の彫刻や廃品を使った織物の作品で知られています。本展では、アナツイの作品とその文化的な背景をなぞっていきます。
会期 12月7日(火)まで
会場 特別展示館

■関連イベント

「ギャブリートーク」
実施日 11月20日(土)

時間 11時～12時
場所 特別展示館

研究公演

ワークショップと公演
「現代の音楽とアフリカ」

アフリカの同時代音楽はどのように生み出され、どう語られ、消費されているのでしょうか。ワークショップや公演を通して、近現代史の構造を浮き彫りにします。
実施日 11月23日(火・祝)

時間 13時30分～15時45分(開場13時)
場所 講堂(定員 450名)
※参加無料、申込不要

※入場整理券を10時から講堂入口にて配布いたします。
お問い合わせ(平日9時～17時)
広報企画室企画連携係
電話 06-6878-8210
※特別展関連のみんぱくセミナーは13ページをご覧ください。

企画展

「アジアの境界を越えて」

人間文化研究機構の連携研究「ユーラシアと日本」での議論をふまえ、東アジアの古代と近現代を対照して、境界やそれを越えることの意味を考えます。
会期 12月7日(火)まで
会場 本館展示場内(企画展示場A)

■関連イベント

「ギャブリートーク」

①実施日 11月13日(土)
時間 14時30分～15時30分

②実施日 11月23日(火・祝)
時間 14時～15時

場所 企画展示場A

※企画展関連のみんぱくウィークエンド・サロンは24ページをご覧ください。

国際シンポジウム

「希望社会への道—スウェーデンと日本におけるウェルビーイングの思想と市民社会」

少子高齢化・多元化する社会で、すべての人が「居場所」を得て、「ウェルビーイング」—心地よい生・安寧・幸福・希望—を感じて暮らすために、わたしたちは何ができるのでしょうか。高齢期の暮らし、雇用と社会保障に注目し、スウェーデンと日本の実践と課題を比較の視点から問い直します。
開催日 11月7日(日)
時間 14時～17時(開場13時30分)
場所 講堂(定員 450名)
※参加無料、申込不要
お問い合わせ
鈴木七美研究室
e-mail:life@dc.minpaku.ac.jp
FAX 06-6878-75003

●アメリカ展示・オセアニア展示場の閉鎖
新しく生まれ変わるアメリカ・オセアニア展示場にご期待ください。
閉鎖期間 11月25日(木)～平成23年3月下旬予定

●無料観覧日のお知らせ

11月3日(水・祝)は文化の日、20日(土)、21日(日)は関西文化の日のため、本館展示・特別展を無料で観覧いただけます。ただし11月3日は、自然文化園を通行される場合入園料が必要です。

●11月1日から7日は「教育・文化週間」です
教育・文化週間は教育や文化への関心と理解を深め、充実・振興を図ることを目的として設定され、今年で52回目を迎えます。この機会に全国で開催されるさまざまな行事へ、ご家族ご友人と一緒にご参加ください。
(文部科学省ホームページ)
http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/kyoiku-bunkai/

みんぱくラジオ「世界を語る」
みんぱくの研究者のお話をラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪(1314kHz)
毎週水曜日 23時30分から24時
※詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■西尾哲夫 著

『NHKカルチャーラジオ 文学の世界 アラビアンナイト—ファンタジーの源流を探る』



NHK出版 定価：900円
翻訳者や校訂者らがアラビアンナイトをどのように変形させていったかを確認しつつ、ファンタジーの源流として世界文学に多大な影響をあたえたアラビアンナイトの役割について、解き明かす。

■廣瀬浩二郎 編著

『万人のための点字力入門—さわる文字から、さわる文化へ』



生活書院 定価：2,310円
09年11月に民博で行なわれた点字に関する国際シンポジウムの報告書。「点字力」の広さと深さをわかりやすく解説する。点が創る新たな宇宙、点が拓く多様な生き方に出会うユニークな文化論。

■関 雄二 著

『アンデスの考古学 改訂版』
(世界の考古学 1)



同成社 定価：2,940円
本書は、アンデス考古学の概説書として1997年に出版された『アンデス考古学』を、この13年間の調査・研究の進展をふまえて、全面的に見直しをおこなった改訂版である。

みんぱくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂

時間 13時30分～15時(13時開場)

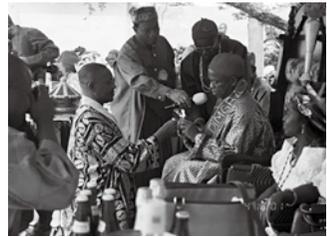
定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第390回 11月20日(土)

【特別展関連】

「アフリカの王様たちは今—ナイジェリアの政治と文化」
講師 松本尚之(横浜国立大学人間科学部准教授)



アフリカでは現在、王権をめぐる様々な現象が起きています。近代国家と伝統王権が並び立つ状況があり、元来王制を持たなかった社会にも王が誕生しています。さらに王たちは、時には外国人をも首長に任命しています。この講演では、ナイジェリアのイボ社会を例に、今日のアフリカで王位や首長位が持つ意味を考えます。

第391回 12月18日(土)

「バルカン商人と羊飼い—民族国家を求めなかつたひとびと」
講師 新免光比呂(民族文化研究部准教授)



近代国家形成以前、バルカン半島には縦横に移動する人々がいました。その名はヴラヒあるいはサラカチヤン。彼らはもともと羊の牧畜を生業としていたが、やがてバルカン商人といわれる集団に加わります。そしてオスマン帝国とハプスブルク帝国の間をゆきまきし、莫大な富を蓄積しました。彼らは自分たちの民族国家をつくることにはこだわらず、それぞれ帰属する国家を拠点に活動しました。その知られざる暮らしと歴史をみてみましょう。

友の会

友の会講演会

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室

定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第390回 12月4日(土)

「マヤの暦について—2012年まであと1年」
講師 八杉佳穂(民族文化研究部教授)

時間 ●14時～15時30分

マヤの長期暦では2012年の暮れに大きな周期が終りを迎えます。世間ではそれが世界の終末思想と結びつけられているようですが、本当にこの世界は終わってしまうのでしょうか。複雑なマヤ暦を読み解きながら考えていきましょう。

第391回 2011年 1月8日(土)

「ことばの歴史・ひとの移動史」

講師 菊澤律子(民族文化研究部准教授)

時間 ●14時～15時30分

語族という言い方を耳にしますが、ことばが同じグループに属するとはどういうことなのでしょう。ことばの分類はなぜ、人の歴史と結びつくのでしょうか。「ことばの遺伝子」の分析と応用についてのお話です。

第392回 2011年 2月5日(土)

「日本におけるチベット研究のはじまり」

講師 青木文教のたつた道

時間 ●14時～15時30分

第77回民族学研修の旅

台湾東部の原住民族を訪ねる

——パイワン族・ブマ族の村へ

2011年3月10日(木)～13日(日) 3泊4日

原住民族が多く暮らす台湾東部を訪ね、パイワン族やブマ族の方々と交流します。原住民族文化のほか、日本とも関係の深い台湾の近現代史についても学びます。

※詳細は上記友の会までお問い合わせください。

特別展解説書

A Fateful Journey: Africa in the Works of El Anatsui
彫刻家 エル・アナツイのアフリカ

編集：
川口幸也、竹沢尚一郎、
松本尚之、水沢勉、朝木由香、
中村誠、渋谷拓

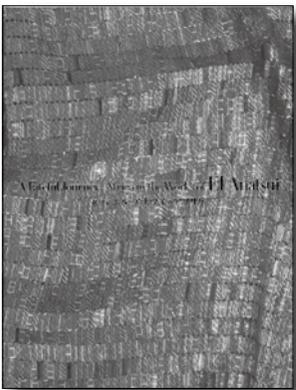
編集協力：
国立民族学博物館

発行：
読売新聞社、美術館連絡協議会

A4変形判235頁
(カラー125頁)

定価：2,240円
(友の会会員価格 2,016円)

発送手数料：400円



現在開催中の特別展「彫刻家エル・アナツイのアフリカ—アートと文化をめぐる旅」では、アフリカの現代芸術がおかれた現状を前向きにとらえなおし、現代アフリカを代表とする彫刻家エル・アナツイというアーティストの作品世界を美術史と文化人類学の双方の視点から語ろうとします。本展覧会の解説書では、エル・アナツイの作品とその背景だけにとどまらず、現代アフリカ美術をめぐるさまざまな問題を幅広くとり上げています。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

こどもとみんなを結ぶもの

——国立民族学博物館

さ お と め けん じ
五月女 賢司 民博 機関研究員

10種類19パックある「みんなぱく」の内のひとつ
「インドのサリーとクルター」



近年、学校と博物館の連携の重要性が叫ばれている。小学校で二〇一一年度から、中学校で二〇一二年度から完全実施される新学習指導要領には、博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るべきことが明記されている。一方、一般来館者として博物館を訪問する知識や経験の異なるこどもたちが、資料や展示と能動的にかかわることで、そのこどもなりの発見や経験をできる学習プログラムも充実している。

さまざまな学習機会

みんなぱくでも、これまで学校や一般向けにさまざまな学習機会を提供してきた。「夏休み子どもワークショップ」や「みんなぱく移動博物館」の取り組み、「もの広場」の公開、「学習コーナー」の開設などがある。また、二〇一一年前後からは学校との連携をより重視した取り組みも始めている。ここでは、みんなぱくが現在おこなっている、こどもを含む利用者向けの活動をいくつか紹介したい。

「みんなぱく」は、試着できる民族衣装の他、生活用具や学用品、楽

器などが入った貸出用の学習キットである。二〇一〇年九月に貸出が開始され、まる八年が経過した。これまで、小中学校の授業での利用を中心に数多くの団体に利用され、大学のゼミや市立博物館への貸出の例もある。

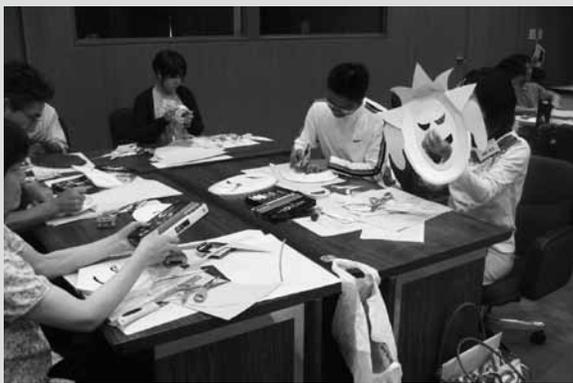
学校教員向けのものとしては、今年で六回目となった「博学連携教員研修ワークショップ」や、毎年春と秋に開催している「遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス」があり、これらも間接的ではあるが、こどもとみんなぱくを結ぶ大切な取り組みとなっている。

両者を結ぶあらたな動き

二〇一〇年四月には新しい「こどもパンフレット」が完成した。小中学生用のパンフレットは一九九七年三月から配付してきたが、小中学生と中学生の計九学年を対象としていたことや、館内案内が中心で学習支援を目的としたものではなかったことなど、課題があった。そのため、新しいパンフレットの対象は原則小学生とし、中学生には大人向けのものを配付することにした。また、館内案内を中心とし

つつも、パンフレットの内容と連動させた付属解説シートを今後作成し希望者に配付することで、こどもたちの学習支援につなげたいと考えている。

みんなぱくの社会連携の動きは、創設とともに始まった。しかし、こどもの博物館における学びには多様な要素が絡み合っており、現代的な課題を踏まえた教育学の視点と実践が必要である。こどもたちのための学習機会の確保と、その質の向上を目指して、今後もみんなぱくの挑戦は続く。



「博学連携教員研修ワークショップ」で仮面づくりに挑戦する学校教員たち

みんぱく 私の逸品 ダンダシユのベリーダンス衣装

世界でも、ベリーダンスの衣装、しかも実際にダンサーが着ていたものが展示されている博物館は、おそらくみんぱくしかないだろう。キャバレースタイルと称されるツープースフレヤースカート、黒に金のビーズ刺繍(お腹の部分はイスラーム的考慮により薄いメッシュの生地が張つてある)。ベリーダンス衣装の王道といえるこれを本当に着こなせる現在のダンサーは、この衣装の持ち主であったダンダシユ以外にまず思いつかない。

照明が暗めのダンスホールでこのブラックの衣装を着ると、白い肌とビーズのきらめきだけが浮き上がる。衣装自体に主張がない分、本当に踊りに自信がないと着ることができない恐ろしい衣装である。彼女の腰の動きはどんな細かい音も逃さず、まさに楽器と化してひたすら音を追いつける。たいした着替えもせずにシャイな少女から、しとやかな美女、跳ねっ返り娘などすべての女を、ほとんど移動もせずお腹と腰だけで演じてしまう。

ベリーダンスにうるさいカイロっ子も往年の大御所ダンサーもミュージシャンも彼女の踊り方こそがエジプトのベリーダンスだという。かなり通好みであり特に日本では知名度が低いが、エジプトでダンダシユの公開レッスンに行くと、集まる

生徒の約半数が世界的に有名なダンサーという事実が彼女の凄さを物語る。残念ながら彼女は現在シヨで踊っていないので、レッスン会場に彼女の踊りを見に行くのである。みんぱくではこの衣装とあわせて、天才ダンサーながら資料の少ない彼女の全盛期の踊りを取材した貴重な映像を見ることが出来る。



プロフィール

ジャズダンス、インド舞踊を経て、1996年よりベリーダンスを始める。1999年エジプシャンベリーダンススタジオ「LotusLand」を設立。毎年エジプトに渡り多数の講師、ダンサーに師事し、テクニックとフィーリングを学びベリーダンスを探究し続けている。
<http://www.lotusland.jp>

標本番号 H0228957 H0228961
地域 エジプトアラブ共和国
受入年 2002年

ロータス

白頭山にのぼる

栗田 靖之
民博名誉教授

二〇〇九年秋、山仲間で長白山に登ろうという事になった。
長白山は中国での名前で、朝鮮半島では白頭山といわれている。

長白山は白頭山

九月三日、朝八時、マイクロバスでハルビンを出発し吉林市に向かう。途中の景色は広大なトウモロコシ畑のあいだに水田が点在している。農家の屋根を見ると、その農家の人が何族であるかがわかるらしい。漢族の農家の屋根には独特の反りがある。それに対して朝鮮族の屋根は直線で、それに加えてかならずオンドルの煙突があるという。その目で周りの農家を見ると、大半が朝鮮族の農家であることがわかる。

吉林市、安図を経て六〇〇キロメートルを走り、午後七時ごろようやく二道白河に到着した。六九年、梅棹忠夫さんが来たころには、守備隊の丸太小屋と民家が二軒あっただけというが、現在は人口六万人の大きな町である。

二三日、朝六時に出発。一時間ほど走って一般の自動車が行き止まりになっている最終地点まで行く。そこからバスに乗り換える。周りのシラカバは、すでに黄色く色づき始めている。三〇分ほどでまた自動車を乗り換える。これから先は急坂を上るため、四輪駆動車に七人から八人ずつが相乗りする。もうこの辺りは森林限界をこえている。二〇分ほど走ると、頂上から標高にして二〇〇メートルほど下にある駐車場に到着した。昨日は水点下になったというが、いま手もとの温度計では四度である。

駐車場からの登山道には、昨夜の雪がところどころに残っている。天気はこのうえない晴天である。ワンピッチの登りで稜線に出る。ここが二六七〇メートルの天文峰とよばれる頂きである。周りは四、五の火山性の切り立った岩峰があり、その岩峰の急斜面を五〇〇メートルほど下ったところに、ほぼ円形の天池が満々と青い水をたたえている。

祖先が天から舞い降りた

この神秘的な光景を見ると、白頭山は朝鮮族にとっては、この頂きに祖先が天から舞い降りたという建国神話の地であり、満族にとっても清朝始祖誕生の聖地で、長く立ち入ることの出来ない土地であった理由がわかる気がする。

一九六二年の中朝国境条約によって、中国と北朝鮮の国境が天池の真ん中を東西に通っている。南の方向、北朝鮮側には最高点の將軍峰（二七五〇メートル）が見える。

振り返って北方に目を移すと、そこは見渡す限りの樹海である。この辺り一帯は中国で唯一、豊富な原生林が残っている地域である。またこの原生林は、かつては金日成が反日ゲリラ活動をした本拠地でもあった。この原生林は、まさに朝鮮民主主義人民共和国の揺籃の地でもある。帰りには天池から流れ出した豊かな水が、七〇メートルの滝となって流れ落ちる長白瀑布を見ることができた。

高句麗の古都

われわれはその日のうちに、四〇〇キロメートルの道を作り、鴨緑江のほとりにある集安の町まで行った。高句麗は、広開土王のときに、諸族を制圧して中国東北地方の大半に支配を及ぼす版図を獲得した。また新羅・百済に進攻していた倭とも接触した。四一四年にこの王の戦績をあらわしたのが広開土王碑である。この碑の存在は一八八〇年までは知られることが無かった。それはこの地方が柳の木で囲われた何人も立ち入ることの出来ない禁断の地であったからである。現在のこの碑は、周囲をガラスで覆われた建物に保管されている。

この集安には、二〇九年、高句麗が王都とさだめた国内城や丸都山城などがあり、四二七年、都を平壤に移すまでは、ここが高句麗の中心地であった。これらを見学した後、清朝が最初に都をおいた瀋陽を経て帰国した。

頂上で万歳

朝鮮半島の研究を専門とする民博の朝倉敏夫さんと話をする機会があった。およそ二〇〇万人いるといわれている朝鮮族の問題は、チベットや新疆ウイグルの民族問題と同じように、中国でセンシティブらしい。朝鮮族は東北地区だけに限らず、最近では上海にまで進出している。彼らは韓国人のびとも関係を持ち、たいへん大きな商売をしている金持ちも多いということだ。それがチベットや新疆ウイグルの民族問題との大きな違いといえる。

しかも中国東北部には、朝鮮半島の古代史を考えるうえで重要な高句麗や渤海の存在がある。高句麗は鴨緑江の北側、集安を中心として国をおこし、平壤に都を移した。だから朝鮮半島の人びとは、鴨緑江北岸こそわが民族発祥の領土と主張できる。一方、中国から見ると、朝鮮半島は、中国東北部に起こったツングース族の末裔が建国した高句麗の子孫であり、高句麗は中国の地方政権のひとつであると主張する。現在でもこの論争が続いている。少し前までは、韓国人のびとが中国側から長白山に登り、民族発祥の地として頂上で万歳をしていたという話である。

この旅では、満族と朝鮮族のあいだにある歴史的、地理的な深い関係を身近に感じることができた。



高句麗の旧都、丸都山城の遺跡
(撮影・寺本 巖)



白頭山の頂上にある天池。
神秘的な水をたたえている



天池から流れ出た水が、長白瀑布となって
流れ落ちる (撮影・寺本 巖)



自動車の最終到達地点に
ある測候所

「共住懇」という少々かわった団体名称のホームページには、「新しいコミュニティのあり方を考え、開かれた地域社会づくりを目指す市民ボランティアグループ」と記されている。その活動拠点は大久保にあり、共同代表である山本重幸さんと関根美子さんほか数名のコアメンバーが現在の活動を支えている。

自ら地域を調べて地域に戻す

八〇年代から九〇年代にかけて、大久保の人びとはあらたな隣人の登場に困惑していた。歌舞伎町に隣接し、かつ日本語学校や専門学校が立地していたため、外国人ホステスや就学生・留学生等のニューカマーが急増したからだ。このような状況のなかで、新宿区主催のコミュニティ講習会「外国人とともにつくるまち」の参加者が九二年に発足させた自主学習会が、「外国人とともに住む新宿区まちづくり懇談会」（二〇〇二年、正式名称を共住懇に変更）である。

共住懇の活動は、自分たちと街との関係を考え、自ら地域調査をおこなうことからはじまった。外国人住民の増加とともに、大久保には、中国・台湾・韓国・タイ・マレーシア等の小さな飲食店や食材店が見られるようになっていた。自分たちで地域のことを調べて地域に戻す、それが九四年に作成した「おいしいまちガイド」である。一軒ずつ店を訪ねて外国人経営者に会い、どのような背景をもつ人びとが大久保で暮らしているのかを実感し、その調査報告としてエスニックレストランのガイドマップを作成した。

びとに向けて大久保の入門ガイドをおこない、街歩き要望に応え、多文化共生について語るという役割が共住懇に求められた。

転換期を迎えた大久保と共住懇

現在の活動の柱は、多文化共生社会と地域防災・減災の推進である。二〇〇五年以降、イベント系の活動は一段落し、東京都や新宿区の外国人支援・多文化共生に関するネットワークへの参加など行政との関係性を強めている。また共住懇代表として、山本さんが地域協議会等で発言する機会も増えている。二〇〇九年のおもな活動は、「しんじゅくアジアの祭り」と休刊していた『OKUBO』の復刊、「第七期 おおくぼ学校」の再開だった。

共住懇は大久保と寄り添いながら現在に至る。その活動を支えるメンバーは、時代によって入れ替わってきた。まるで呼び寄せられたかのように、そのときに必要とされる人材が登場し、あらたな活動を興して共住懇を牽引した。当初は地元住民中心だったが、現在は外部の人も多い。しかも各メンバーの想いと関心は一樣ではない。それぞれが自らの関心領域で主体的にかかわり、それらが集まって共住懇を形成している。

大久保は激しく変化している。特に、日韓共催ワールドカップとその後続く韓流は、多大な影響を及ぼした。しかし勢いを増しているのは韓国だけではない。小さなモスクを囲んでイスラーム教徒のための食材を扱うハラールフード店が急増する横丁、各国のエスニックレストランが次々と

多文化を
ささえる
人びと

共住懇の目指すもの、それは大久保でコミュニティをどう作るかだ。

新宿区大久保は多国籍の人びとが住まい働く街だ。地域の外国人人口は、三分の一を超えた。

「コリアンタウン」「多文化共生の街」を求めて、大久保を訪れる研究者やメディア関係者は多い。

その彼ら・彼女らが、大久保で最初に訪ねる団体が「共住懇」である。

稲葉 佳子
法政大学兼任講師

九〇年代後半、大久保は一大エスニックビジネス拠点に変貌していく。店舗数が急増し、ガイドマップは二、三年ごとに改訂され、二〇〇一年版まで発行された。

人と人のつながりを作る

九九年以降、共住懇の活動は大きく展開する。地域情報紙『OKUBO／おおくぼ』の刊行があり、さらに、その後の活動のひとつの柱となる防災というテーマが見出された。大震災で甚大な被害を受けた神戸市長田の人びととの交流がはじまったからだ。在日コリアンやヴェトナム人など多くの外国人が被災した長田の経験は、密集市街地で日本人と外国人が混住する大久保に重ねられ、人と人がつながることの大切さが確認された。

共住懇は、防災をテーマとするシンポジウムや映画祭、そして、いろいろな人びとが出会い交流できる「新宿益ダンス（現・アジアのまつり）」等を次々と仕掛けた。いざというときに助け合うには、まず知り合うことが必要だ。また「市民と自治体の協働による多文化共生推進のための政策フォーラム」開催など、外部団体との連携・協力事業も増えていった。さらに、その後の重要な活動となる連続講座「おおくぼ学校」もはじまった。これらの新しい活動を通して人と人が出会い、地元商店会や町内会と外国人キーパーソンがつながり、同時に共住懇も地域の人びととの関係を見出していった。

やがて、多くの研究者や大学ゼミ、メディアの注目が大久保に集まるようになると、これらの顔を揃えるストリートなど、大久保は多国籍の人びとが発散するエネルギーの渦のなかにある。そして今やホスト社会の人びとは、隣人となった外国人と幾つかの接点を形成している。それらは、両者が自ら切り開いてきた関係性である。共住懇以外の団体も活動している。

地域の人びとが自律的にコミュニティをマネジメントするようになった大久保では、共住懇は多文化共生にかかわるアクターの一人になりつつある。共住懇は転換期を迎えている。その活動のあり方や進め方は、これまでとは異なっていくだろう。しかし山本さんが常に「共住懇は発足以来、新宿というコミュニティをどうするかについて活動しています」と語るように、共住懇の目指すものは変わらない。

2009年しんじゅくアジアの祭りでおこなわれた防災イベント（提供・共住懇）



韓流で賑わう職安通り



地域情報紙『OKUBO』



タイルの装飾壁面が美しいトルコ料理屋



大久保通りの多国籍看板

バッタとの格闘

その名前は「サバクトビバッタ(砂漠飛蝗)」というらしい。忘れもしない一九八八年一月、雨季も終わりにさしかかったころ、セネガルで見えたあの大群は国際連合食糧農業機関(FAO)の記録にも残る大被害を西アフリカ一帯にもたらした。

度肝を抜かれる

わたしはバッタの大群のまさにど真ん中にいた。セネガルのファティック州のある村で調査をしていたこの年、ニュースでは隣国マリでのバッタの大発生を報道していた。田圃にイナゴが飛び交う程度の状況を想像していたわたしは、村に押し寄せてきたバッタの大群に度肝を抜かれた。インディ・ジョーンズ・シリーズの映画さながらの昆虫の襲来である。この種のバッタは成虫になってもしばらくは飛ぶことができない。大群になつて地面を這いながら、ひたすら一定方向に進んでゆく。まるで何かに取り憑かれていて一群のようだ。辺り一帯が緑と茶色のバッタの体色に染ま

り、地面が波打つようにうごめいて見える。バッタの身体や草がこすれてわずかにかさかさという音も聞こえる。進行方向に木や建物などの障害物があれば避けることなくまっすぐ上り、また地面にもどつて突き進む。食べられるものはすべて食い尽くしてゆく。木であれば一枚の葉も残らず、草ぶき屋根は丸裸になる。大群は我先に進もうとする統制のとれていない行進のようだ。互いの身体を乗り越えながら、交尾をしながら死骸を頬張る。道路では車に潰された死骸がどろどろになって、車はスリップした。

悪戦苦闘

日本にはイナゴを佃煮にして食べ

る習慣がある。もつともそういう知識は日本だけのものではない。タイではバッタの空揚げを自転車の荷台に積んで売り歩く人を見た。つい先日には、フランス人の農業研究者が大発表と称して、バッタの有効利用についてテレビで得意気に話していた。いまさらこんな話でもないだろうと思つたが、この研究者は大量のバッタを美味しく食する方法を自ら開発し、試しているらしい。フランス料理に登場するバッタはどんな味だろうか。

しかし、ムスリムの多い西アフリカの人びとは、コーランに則つて殺した動物しか食べない。豚や野生の小動物なども食べない。そうになると、バッタが料理される可能性は極めて

低いのではないだろうか。そうならば、この大量のタンパク質を肥料にでもすればよいのと思つたが、セネガルの人びとはまったくそういう関心がないようだった。バッタは数日をかけて村を通り過ぎていった。人びとは太鼓を叩いたり、焚き火をしたりして、バッタが屋敷のなかへ入ってくるのを妨害しようとして苦戦していた。もつと効果的な駆除方法はないものだろうかと思つたが、あの大群は人間の力で何とかできるようなものではなかったと今になってみると理解できる。

黄色に染まる空

バッタは雪だるま式に増えながら



さらに増殖しようとする生命力をあらわに進むバッタの一群

西へ向かつて移動を続け、とうとう沿岸地帯まで辿り着いた。大きな黄色の身体に成長したバッタは、アフリカ大陸の西端から大西洋を渡つて、カリブ海沿岸まで四〇〇〇キロメートルという旅をしたそうだ。海辺にある首都ダカールでは、空一帯がカナリアより大きなバッタの大群で黄色に染まり、ベランダのガラス窓にバッタがぶち当たり、部屋のなかにまで飛び込んでくるものもあった。ヒッチコックの『鳥』が現実になつたようだった。

それにしても方向を定めて進んでゆくのは不思議な本能である。餌を求めためか、繁殖のためか、天敵から逃れるためなのか、諸説がある。また、バッタは磁力を感じて移動するとか、風の流れを捉えるのだという説も耳にした。風に乗るといのはほんとうらしい。風速に近い速度で、一日に一〇〇〜二〇〇キロメートルを移動するという。

バッタの大発生は古来にも記録があるが、毎年というわけではない。ただしいったん大発生すると群れが次世代の群れを生むため連続して起こることが多い。気候条件がそろつて、ある程度以上の個体数が生まれると、その集団の密度が個体に変異を及ぼし、移動に適した個体に変化する。その数は、一平方キロメートルあたりに数千万匹が数えられると

いう。個体数が増えれば増えるほど、個体は群生行動をするようになり、その傾向はさらに強くなって次の世代に遺伝する。なにしろ数カ月で一〇世代以上にわたつて増加をもたらす繁殖能力をもっているのである。

残るは神頼み

日本でもイナゴやバッタの被害はめずらしいものではなかった。一九世紀末には北海道の開拓地での記録的な大発生がみられたほか、二〇世紀後半でも沖縄の大東諸島や鹿児島、馬毛島などで被害が生じた。二〇〇七年には関西空港でもトノサマバッタが大発生した。九世紀の古文獻(『古語拾遺』)には蝗害防止のために祭事を執りおこなったことが記されている。各地の神社には蝗害に対する祈禱をおこなった記録が残っているらしい。

神頼みは時代を越えていずこでも同じだったようだ。セネガルでも祈禱師が登場した。太鼓や火でバッタを追いかつたというのほとんど神頼みに近い。もちろん近年になつてやつと国際機関による薬剤散布がおこなわれるようになった。しかし、それで退治できるのはたかがしれている。干ばつが人間の手には負えない天災であるように、バッタの被害もまたそういうものなのだ。

草原にひびくクルアーン

藤本透子
民博 機関研究員

中央アジアの広大な草原に生きるカザフ人たちは、死者の霊魂のためによくクルアーン（コーラン）を朗唱する。彼らはスンナ派のイスラーム教徒として知られるが、中東とはまた異なる彼らのイスラームのあり方にわたしはずっと魅せられてきた。

旧ソ連の一部であったカザフスタンでは、反宗教的政策がとられたソビエト時代をへて、独立前後から宗教的かつ民族的な儀礼がとりわけはなやかにおこなわれるようになっていた。わたしの調査の目的は、現代における宗教復興のかたちを、草原の村から見つめることにあった。

その年最初の馬乳酒

カザフスタン最大の都市アルマトウからステップを北へ約一〇〇〇キロ、バヴロダル州バヤナウル地区の人口約七〇〇〇人の村で、カザフ人たちの二年間ともに暮らした。彼らはかつて遊牧生活を送り、定住化した現在もその多くは牧畜にたずさわる。

長い冬が過ぎて、草原がいちめん若緑色にそ

わせに思われる。イスラームの教義で飲酒は禁じられているからだ。しかし、カザフ人にとって、クムズ（馬乳酒）はアラク（酒）とみなされていないことが次第にわかった。アラクは外来のウォッカやビールなどをさし、クルアーンが朗唱される場で口にされることはない。これに対して馬乳酒は草原の暮らしの恵みであり、イスラームに反するとはみなされない。

そこで次にうかがふ疑問は、クルアーンはなぜ死者の霊魂のために朗唱されたのかである。

死者が生者にもたらす豊かさ

もともとクルアーンに、死者の霊魂への崇敬は説かれていない。しかし、「死者が充ち足



ウマの搾乳は夏の仕事

まった六月のある日、その年最初のクムズ（馬乳酒）を飲みに来ないかと村の女性に誘われた。招待された家へ行くと五〜六人の村人が集まっており、馬乳酒が大きな茶碗になみなみと注がれた。乳白色のさらりとした液体に灰

りなければ、生者は豊かにならない」とカザフ人たちは語る。彼らによると、牧畜の恵みや子どもの成長といった暮らしの豊かさは、アルワクすなわち死者の霊魂のためにクルアーンを朗唱することでもたらされる。アルワクは目に見えないが「生きて」おり、金曜日ごとに自分の家を訪れて戸口に座る。子孫がクルアーンを朗唱すればアルワクは充ち足り、そうでなければ夢にあらわれて供養を促す。供養されればアルワクは子孫を守るが、供養しなければ「悪いことがおきる」という。

草原の村に暮らすうち、死者のためのクルアーン朗唱が生活に深く浸透し、葬儀や一年忌だけでなくじつに多くの祝いの場でおこなわれていることが明らかになった。それは例えば、新築祝い、大学卒業祝い、祖先の生誕一〇〇年祭、イスラームの犠牲祭や断食月、牧畜にかかわる祝いなどであり、その年最初の馬乳酒のもてなしは数多いクルアーン朗唱の機会のひとつだったのである。

草原の暮らしに根ざした宗教復興

カザフ人のあいだで、イスラーム教徒の義務とされる断食や一日五回の礼拝をおこなう人は増えつつあるが、全体から見ればなお少数にとどまる。一方、死者のためのクルアーン朗唱に参加したことのない人はきわめて稀である。カザフスタン独立後に宗教復興の中心となったのは、まさにこの死者の霊魂への崇敬を背景としたクルアーン朗唱であった。

色がかった脂肪分が点々と浮き、酸味とともに、いぶした木の香りがほのかにただよう。馬乳酒は、カザフ人たちの夏のごちそうだ。一日五〜六回搾乳し、木の桶に入れて数百回から一〇〇〇回ほど攪拌して発酵をうながす。栄養価が高く薬効もあるとされ、夏になると村人たちは家々を訪問し合って馬乳酒を飲む。数パーセントのアルコール分が含まれ、杯を重ねることにほろ酔い加減で明るい気持ちになる。

クルアーン朗唱の風景

談笑しながら馬乳酒を味わった後、「その年最初の馬乳酒を飲んだときには、アルワク（死者の霊魂）のためにクルアーンを朗唱するものだよな？」と、最年長の男性が言ったことには驚いた。皆がうなずくと彼は、おもむろにクルアーンを朗唱し始めた。そして、「クルアーン朗唱という善行の報酬が、死者たちにもたらされるように」と述べ、祖先たちの名を列挙して祈ったのだった。

クルアーン朗唱と馬乳酒は、意外な組み合わせ



零下30度の冬もウマの放牧は続けられる



クルアーン朗唱の風景。断食月の日没後の食事にて

新設されたイスラーム大学やモスク付属の教育施設で学ぶ若者たちは、死者の霊魂よりアッラーへの信仰を強調する。しかし彼らも、死者のためのクルアーン朗唱を完全には否定せず、イスラームの教えに則した喜捨の一形態として認める場合が多い。

カザフ人たちのクルアーン朗唱の風景は、系譜意識や土地の記憶とも結びつきながら、彼らのアイデンティティのよりどころとなっている。政治面で「過激派」のみが話題になりがちな現代のイスラーム復興だが、草原の村のイスラームからは、より生活に根ざした宗教復興のかたちが見えてくる。

11月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分(予定)

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が来館された皆様の前に登場します!
「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別!
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

7日
(11月11日)

話者: 佐々木史郎(副館長/民族社会研究部教授)

話題: 【企画展「アジアの境界を越えて」関連】
アムールの人々の文化交流

場所: 企画展示場A

14日
(11月18日)

話者: 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授)

話題: イヌイット・アートについて

場所: アメリカ展示場

28日
(11月25日)

話者: 杉本良男(民族社会研究部教授)

話題: アートになったインド・サリー

場所: 南アジア展示場

編集後記

今号の特集では、腹の文化的意味をさまざまに論じていただいた。シンボル事典によれば腹は母性に結びつけられることが多いようだが、日本のことわざを見ると、容易に見せない深い考えや本心を収める中心地のようなものである。腹を合わせる、腹を決める、腹ふくるる思い、腹の探り合い、腹黒、腹芸、腹を割って話す、腹を探られる、などはその例だし、腹には虫が居るとときには騒いだりする。中央にあるヘソを体の中心と見なすのも、インドのヨーガ思想が起源とされる臍下丹田にも相通じるようだ。ヨーロッパでは体の中心を心臓に置くことが多いというから、文化における身体観の違いは面白いテーマだと、あらためて思う。

今号には、驚異譚の話題やバッタの行進など、驚きというテーマも仕込まれている。博物館の起源のひとつが、15世紀~17世紀に欧州の王侯貴族や文人が作った「驚異の部屋」であったことを思い出しつつ、本誌でも読者の方々に向けて知的な驚きを発信し続けたい。(久保正敏)

●表紙: 「布袋(三猿)」 資料番号: H0199533

中国の仏僧に由来する布袋像。中国では豊かさの象徴。日本では七福神のひとつに数えられ、世界的にはブツダの名で知られる。三猿の「見ざる」を象徴する本資料は中国製であるが、収集地はアメリカ。

次号の予告

特集

家畜にみる生き物の多様性

月刊みんなく 2010年11月号

第34巻第11号通巻第398号 2010年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 朝倉敏夫 榎永真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一孝

制作・協力 財団法人千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1年間みんなくに何度でも入館できる

「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通ください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

